

学科 管理栄養学科	所感 TP を作成することで、自身の学生に対する指導・支援姿勢を改めて考え直すことができた。学修内容や学修の進め方を年度ごとにマイナーチェンジしているが、今一度検討していきたい。
氏名 内田友乃	

家政学部の教育目標は、本学の教育目標と教育方針の下、「真心・努力・奉仕・感謝」の四大精神の実践を通して社会的に自立して生きていく上で必要な1スキル・リテラシー・教養等に関する一般的知識・技能と2家政に関する専門的知識・技能と3建学の精神・社会人基礎力・pisa型学力を統合的に身に付け、社会に出てからは、これらの知識・技能をベースに生涯学習社会の中で自己の潜在能力をさらに開発しながら、職場と地域の課題解決に貢献できる人材を育成することである。

ロ 管理栄養学科の教育目標は、家政学部の教育目標の下、管理栄養士の資格を生かして、チーム医療、健康増進・疾病予防、食育・栄養指導又は健康をテーマにした食品の研究・開発等で活躍することによって、人々の日常生活を健康の面から支援することのできる人材を育成することである。

1 教育の責任

私は、本学家政学部管理栄養学科専任教員として、2025年3月の時点で14年(途中20か月休職)勤めている。これまでに、オムニバス科目を含めて13科目担当してきた。

その中でも管理栄養士に必要な専門能力の基本となる知識・技能に関係する科目を主に担当しており、人体の構造と機能及び疾病の成り立ちの分野の「解剖生理学」を中心に、座学と関連する実習を担当している。これら

2023年度担当科目			
科目名	開講期	受講者数	備考
解剖生理学Ⅰ	1年前期	68	専門基礎分野 (管理栄養士・健康運動実践指導者必須)
解剖生理学Ⅱ	1年後期	64	専門基礎分野 (管理栄養士・健康運動実践指導者必須)
解剖生理学実習Ⅰ	1年後期	61	専門基礎分野 (管理栄養士・健康運動実践指導者必須)
解剖生理学実習Ⅱ	2年前期	77	専門基礎分野 (管理栄養士・健康運動実践指導者必須)
管理栄養士への道	1年前期	64	オムニバス 初年次教育
他オムニバス科目6科目 (管理栄養士特論、専門実践実習(疾病予防分野)、アウトリーチ等)			

の基本の知識・技能を身につけることで、様々な職種で活躍できる管理栄養士の礎になると思い教育に従事している。また初年次教育にも関わり、管理栄養士としてのキャリア形成を低学年より支援している。また2023年度は、大学学生委員長を務め、健康運動実践指導者担当教員として試験対策講座等も担当した。その他、大学運営委員、学生募集委員、学びの泉開発委員、内部質保証委員、3つのポリシー策定委員を担当し、学外では、健康おかざき21計画推進協議会委員、岡崎市食育推進専門委員および岡崎市食育推進委員を務めている。

2 教育の理念と目的

栄養学の専門的知識および技術を統合し、課題に対して必要な情報を収集・選択し、科学的視点を持って論理的に判断し、健全な発育・発達、健康の維持・増進、疾病の発症予防・重症化予防、治療に貢献できる管理栄養士を養成したいと考えている。自身は基礎的な科目を担当することが多いため、まずは、人体の構成・しくみの基礎や、正常な状態の体内の変化を理解できるよう、分かりやすい授業展開を心掛けている。中学校や高校までの理科や生物の学修の上にある科目であることから、得意不得意が出やすい科目ではあるが、将来管理栄養士として対象者に対して、個人に合ったより適切な栄養ケアプランを実践する必要があるため、他者に対して説明することで学生自身の理解を深められるように意識している。

3 教育方法

講義科目では、① 授業シートと呼ばれる<予習・本時の授業・復習>をA3一枚で実施する、オリジナルの授業用シートを作成し、活用している(添付資料2)。予習では、提示した教科書を調べれば簡単に回答できるものとしているが、より主体的な学修を促すため、教科書以外の出典にも目を向けさせている。そして、必ず出典を明らかにし、振り返って学修できるようにしている。② 知識を授けることを中心に実施しがちであるが、授業内で2~3つの問いを設け、学生に考えさせ、他人と共有する時間を作っている(添付資料3)。具体的には『~についてまとめ、説明しなさい』などの問いに対して、他者と相互に説明しあって、理解を深める工夫をしている。③ 授業内で疑問に思ったことを自ら調べられるよう、疑問点などを記載する欄も設けている。④ 授業の最後に、『授業後テスト』ということで、授業内の理解を確認するための○×式問題を回答させる。×の問題を中心に復習をし、翌週『復習テスト』を実施し、知識の定着を図る工夫をしている(添付資料4,5)。④ 復習時に本時の授業を理解しているかを確認するための演習

問題を各自作成させている。單元ごとにグループで演習問題を作成し、受講者全員で共有し、さらに分かりやすい解説を作成させ、その中から期末試験問題の一部を出題している。受講者全員で協力して理解する、授業を展開することを促している（添付資料 6）。実験実習科目では、講義同様、⑤ 授業シートを用いて実験方法の理解や結果の考察に必要な見解を調べるように促している。⑥ 学生は実験のテーマごとにレポートを作成し、実験結果を基に、人体の構造や様々な調節のしくみについて理解を深められるようにしている。また、グループでの発表機会も設け、様々な方法を使用し、受講者全員で協力して理解する体制を作る努力をしている。なお、授業シートやレポートについては、添削してコメントを付け、返却している。

4 授業改善の活動

担当する全科目の授業アンケートを活用し、授業改善を行っている。リフレクションペーパーに授業に対する教員の課題を抽出し、具体的な改善案を明記し、学生にフィードバックしている。授業担当当初は、『内容が多すぎる・覚えることが多い・進むスピード速い』といった学生の意見が多かったため、内容を見直し、教科書で予習できる範囲は説明を短くし、「授業後テスト」や「復習テスト」を設けることで、授業回ごとに予習・復習する時間を意図的に増やしている。覚えることが多いことには変わりはないが、低学年次より復習する習慣が付くことでつまづきが少なくなると思い、努力させている。また、学生の理解度を常に確認しながら、説明を増やし、翌週に補足プリントを配って対応するようにしている（添付資料 7）。授業方法は、学内の公開授業での方法を参考にし、適宜取り入れている。2021年度以降は、学生同士のディスカッション時間を長くとりよう努力した。さらに学生の主体的な学びを促すため、2022年度からは、使用している教科書特典である Web 演習問題を使用できるようにした。登録者および使用者は年度を追うごとに増えており、今後、よりよい活用方法を検討していきたい。

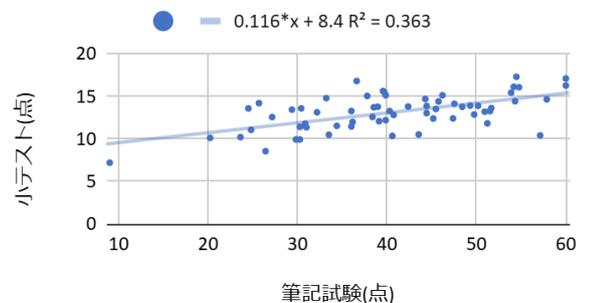
5 学生の授業評価

担当するすべての科目で授業評価アンケートを実施した。多くの項目で 5 段階評価の 4 以上であったことから、自身の授業への取り組みについては評価されていると感じた（添付資料 8,9）。しかし、予習や復習が学修内容の理解に十分に繋がっていない学生がいるため、予・復習の重要性をよりきちんと説明し、理解を得られるような工夫が必要であると感じた。また講義、実習科目いずれも社会人基礎力の「創造力」を発揮できていない、と自己評価している学生が多かった。担当する科目は今後学ぶ専門科目の基礎となる知識であり、ヒトの身体の正常な機能を理解することが目的である。その内容を学生自身が他者に分かりやすく説明することができるようになるには、理解した内容を「創造力」を発揮して他者に伝えなければならないと考えると、より学生同士のディスカッション時間を増やして、能力を伸ばす手助けが必要だと考えている（添付資料 8,9）。実習科目では、グループでの実験や発表の際に、得られた結果や情報をどのように分かりやすくまとめる際に、「創造力」が必要だと感じたのではないかと推察している。他にも、「計画力」と「実行力」といった「考え抜く力」を挙げるものが多かった。この力を伸ばすためには、学生たちが到達目標を意識して授業に臨むことが大事であることを今一度認識できるような声掛けや働きかけを行ってきたい。

6 学生の学修成果

1 年次後期開講の解剖生理学Ⅱの期末試験（筆記試験）結果と毎時間授業後に行うテストと翌週実施の復習テストの合計点（小テスト）を右図のようにまとめた。受講者 64 名の内、成績評価の内訳は S 9%, A 22%, B 28%, C 36%, F 5%であった。成績評価として、平準化の基準と比較すると、C および F 評価が多く、A および B 評価が少ないものの、全体的に評価が上がっていた。小テストの平均点は 13.1 点(20 点満点)であった。小テストと期末試験(60 点満点)の相関を見ると、0.603 と弱い正の相関が見られた。これは例年同様の傾向である。

筆記テストと小テストの相関



このことから、毎回の授業後テストおよび復習テストで得点の高い者の方が筆記試験の点数が高かったということが言え、日頃の予習・復習の積み重ねがいかに大事であるかを学生に認識させる必要があると感じた。一方で C および F 評価の学生が平準化の基準よりも多いが、他の科目の基礎となる分野であること、国家試験の出題分野でもあることから、これ以上難易度を下げることには考えていない。学生の成績底上げのためには、分からない点

を質問に来やすい環境の整備、また学生同士が教えあえる仕組みを検討したい。

7 授業科目に関連した教材開発

授業内容に合わせた PCR シートを毎時間ごとで作成している（添付資料 2）。また、授業後テストや復習テストを作成して、学生に実施している（添付資料 4,5）。必要に応じて、分かりやすい図を示すなど、補足説明のプリントを用意している（添付資料 7）。

8 指導力向上のための取り組み

本学が主催する FD 研修会に参加し、教育改善の方策のヒントを得ている。FD 研修会への参加記録は添付資料 10 に示す。また毎年開催の公開授業を参考にし、他の先生方の手法を参考に授業改善を行っている。学外では、教育実践に関する研究・事例を報告した論文や紀要を参考にしている。また授業内容に関連する動画等も見て、どのように説明すると学生に分かりやすいか、中学校や高校まででどの程度学んでいるかの確認に利用した。また、学外においては、研究活動は卒業研究をはじめとする授業の指導力向上につながると考え、学会発表等にも積極的に取り組んでいる。さらに、健康運動指導士養成講習会の講義も担当して、指導力向上に努めた（添付資料 11）。今年度は学会発表 2 回、書籍執筆 1 本、学科内の研究会誌 1 本の執筆に取り組んだ（添付資料 12-15）。

9 今後の目標

短期的な目標としては、講義科目内で pisa 型学力の解決に該当する部分を増やして行き、学生の力を伸ばしていきたいと考えている。実験実習科目では、レポートの書き方が分からず苦戦している学生も一定数いる。今年度より、評価ルーブリックをレポート作成時に事前に学生に渡すことにより、レポートの書き方が明確になった学生も居たようである。今後はこれまで以上に、考察のヒントを多く提供し、レポート返却時に全体に向けてのフィードバックの時間を長く取っていききたい。また、個別対応も充実させ、躓いている状況や度合いに合わせた支援をしていききたいと考えている。長期的な目標として、学生自身がもっと人体の構造や機能に興味を持ってもらえるような、より楽しめる授業展開を考えていきたい。

10 添付資料

添付資料 1 「シラバス」、添付資料 2 「PCR シート①」、添付資料 3 「PCR シート②」、添付資料 4 「授業後テスト」、添付資料 5 「復習テスト」、添付資料 6 「演習問題」、添付資料 7 「補足説明プリント」、添付資料 8,9 「リフレクションペーパー」、添付資料 10 「FD 研修会への参加記録」、添付資料 11 「令和 6 年度健康運動指導士養成講習会講義資料」、添付資料 12 「一般社団法人日本家政学会第 76 回大会要旨集」、添付資料 13 「第 34 回ビタミン E 研究会大会要旨集」、添付資料 14 「プレシジョン栄養学 データ駆動型個別化栄養学の社会実装に向けて p.2137-260」、添付資料 15 「研究会誌原稿」